

Title	エスペラント語の所有形にみられる規則性と不規則性
Author(s)	藤原, 敬介
Citation	外国語教育のフロンティア. 2019, 2, p. 379-385
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71906
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

エスペラント語の所有形にみられる規則性と不規則性

Regularity and irregularity found in the possessive form of Esperanto

藤原 敬介

要約

エスペラント語はL.L. ザメンホフによって1887年に発表された人工言語（国際共通補助語）である。本稿では、大阪大学外国語学部におけるエスペラント語教育の歴史を概観したのち、エスペラント語の所有形にみられる規則性と不規則性について考察する。エスペラント語の人称代名詞には理論的には二種類の所有形がありうる。ひとつはエスペラント語文法に規定された所有形であり、人称代名詞に形容詞語尾“a”を付加した形式である。もうひとつはエスペラント語の相関詞表から類推される形式であり、人称代名詞に所有の相関詞の標識“es”を付加したものである。形式的にいえば前者がむしろ不規則であり、後者が規則的である。しかし実際には前者しか使用されない。その原因は、人称代名詞の有生性によるものではないかと論じる。

キーワード：人称代名詞、相関詞表、有生性

1. はじめに

エスペラント語¹⁾ (Esperanto: ISO 639-3 epo) はL. L. ザメンホフ (Lazaro Ludoviko Zamenhof) [1859–1914] によって1887年に発表された人工言語（国際共通補助語）である。エスペラント語には16条の基本文法 (Zamenhof 1905) があるのみで、例外がないといわれる。しかし実際には、エスペラント語の基本文法自体に、例外的なものが存在する。

本稿では、大阪大学外国語学部におけるエスペラント語教育の歴史についてまず概観する。そして、エスペラント語文法に内在する問題点を、「ザメンホフ表」とよばれる相関詞表を対象に紹介する。

2. 大阪大学におけるエスペラント語教育

本論にはいる前に、大阪大学外国語学部におけるエスペラント語教育の歴史について、簡単にふれておきたい²⁾。大阪大学外国語学部におけるエスペラント語教育には、大阪外国語大学時代以来、半世紀以上の歴史がある。言語学の川崎直一教授 [1902–1991] が1951年度に「(初級) エスペラント」を開講し、1967年の定年後も非常勤講師として1978年度まで担当した。1979年に大阪外国語大学が上本町から箕面に移転し、一度は閉講となった。

1979年度からはしばらく不開講であったが、1991年度にモンゴル語科出身の谷博之（タニヒロユキ）[1955–2014] が非常勤講師となり、エスペラント語の授業が復活した³⁾。2007年10月に大阪外国語大学が大阪大学に統合されたのちも、ひきつづきエスペラント語は開講されてきた。谷講師の急逝をうけて、2014年10月からは筆者が担当している。

川崎教授による授業がどのようなものであったかは不明ながら、川崎（1963）に準じた授業をしていた可能性はある。谷講師の時代には、受講生によると、未公開自作教材でエスペラント語文法を学習するだけでなく、エスペラント語の歴史やザメンホフの思想、さらに「民際語⁴⁾」についても学習する機会があった。音楽言語ソルレソル、先駆的な後験語ボラピェク、スタートレックのクリンゴン語など、エスペラント語以外の人工言語についても解説があったとのことである。大阪大学のホームページで現在も閲覧できる谷講師によるシラバスには、大阪外国語学校初代校長・中目覚（なかのめ・あきら）[1874–1959] 以下、伊東三郎 [1902–1969]、浅井恵倫 [1895–1969]、川崎直一、栗栖継 [1910–2009]、平井征夫 [1944–2002] といった、日本のエスペラント史に名をのこす、大阪外国語学校・大阪外国語大学ゆかりの人物の名前があがっている。筆者によるシラバスでも、谷講師によるシラバスを踏襲し、上記の人々の名前をあげるようにしている。

3. ザメンホフ表とは

日本語の「こそあど」ことばに類似したものがエスペラント語にはある。エスペラント語では相関詞表あるいはザメンホフ表とよばれ、45の相関詞が論理的に配置されている⁵⁾。エスペラント語の相関詞表は表1にしめすとおりである。

表1 エスペラント語の相関詞表（ザメンホフ表）

	i-	ki-	ti-	ĉi-	neni-
	不定	疑問	指示	普遍	否定
+a	ia	kia	tia	ĉia	nenia
性質	ある	どのような	そのような	あらゆる	何もないような
+al	ial	kial	tial	ĉial	nenial
理由	なぜか	なぜ	それゆえ	あらゆる理由で	どんな理由でもない
+am	iam	kiam	tiam	ĉiam	neniam
時間	いつか	いつ	そのとき	いつも	決してない
+e	ie	kie	tie	ĉie	nenie
場所	どこか	どこ	そこ	いたるところ	どこにもない
+el	iel	kiel	tiel	ĉiel	neniel
様態	どうか	どのように	そのように	いかようにも	いかようにもない
+es	ies	kies	ties	ĉies	nenies
所有	誰かの	誰の	そのひとの	各人の	誰のでもない

+o	io	kio	tio	ĉio	nenio
もの	あるもの	何	それ	すべて	何もない
+om	iom	kiom	tiom	ĉiom	neniom
量	いくらか	どれほど	それほど	ありたけ	すこしもない
+u	iu	kiu	tiu	ĉiu	neniu
特定	あるひと	どれ・誰	そのひと	おのおの	誰もない

表1をみればわかるように、自然言語では存在しないようなところまで、相関詞が整然と配列されている。さらに、エスペラント語に存在する各種の品詞語尾や接尾辞を付加することも可能である⁶⁾。しかしながら、この表のなかに、エスペラント語の基本文法とは齟齬をきたす原因となりうる部分が存在する。

4. ザメンホフ表の問題点

エスペラント語では、相関詞が拡張され、Zamenhof (1905: §30) にはあがっていないものが使用されることがある。たとえば“ali-”「他」という語根から、相関詞表からの類推により、“alies”「ほかのひとの」や“aliel”「ほかのように」といった表現が使用されることがある。これらの表現は、ザメンホフ自身は使用しておらず、エスペラント・アカデミーにも公認されていない非公式語彙であり、各種エスペラント語辞典（たとえばPIV2005や『エスペラント日本語辞典』）では使用が非推奨である⁷⁾。しかし、(1) にしめすように、使用例が見つかる⁸⁾。

(1) a. Temos pri **alies** tasko ... mi bezonos nenion pli, nenion plu. (TE: *Artikoloj el Monato*)

「他人のすることについていえば... 私はこれ以上、もはや何もいらぬ」

b. En la vendejo (**aliel** mi ne povas nomi ĝin) estis neni. (TE: *Vojaĝo al Kazohinio*)

「その店に（他にはそれを名づけようもないのだが）誰もいなかった」

(1) にしめしたように、たとえ使用が推奨されていなくとも、エスペラント語においても類推によってあたらしい表現がうまれている。この点で、エスペラント語は自然言語とかわるところがない。

エスペラント語が自然言語とことなる点は、Zamenhof (1905) によって文法が規定されている点である⁹⁾。Zamenhof (1905) はエスペラント語の基本文法を16条にまとめ、42章からなる練習問題と、917の語根をあげた語彙集からなる。Zamenhof (1905) にあがっているものがエスペラント語の根幹をなす。しかし、Zamenhof (1905) でふれられていないことについてはまもる必要がないという側面があり、(1) にしめしたような類推からの表現が生じうる。

さて、エスペラント語の基本文法とザメンホフ表とで齟齬をきたす点は、人称代名詞の所有形である。エスペラント語の基本文法16条のうち第5条では人称代名詞があつかわれ

ており、おおよそ (2) のように記述されている¹⁰⁾。

(2) 人称代名詞は *mi* 「わたし」、*vi* 「あなた」、*li* 「彼」、*ŝi* 「彼女」、*ĝi* 「それ」である。

所有形は形容詞語尾を付加する。たとえば *mia* 「わたしの」である。

“mi” 「わたし」に対する所有形は、ザメンホフ表からの類推では、“mies” になることが予想される。しかし、実際には“mies” という語形が使用されることはまずない¹¹⁾。基本文法第5条に記述されるとおり、“mia” という形式のみが通用している。

“mies” に類する表現について、代表的なエスペラント語文法では (3) のようにのべられている。

(3) a. La genitivo, kvankam teorie ebla (*mies, vies*), estas neuzata kaj anstataŭata de la posedaj adjektivoj (*mia, via*). (Kalocsay & Waringhien 1985⁵: 71)

「属格は、理論的には可能であるけれども (*mies, vies*)、つかわれることはないし、所有形容詞で代用されている (*mia, via*)」

b. Iafoje oni renkontas posedajn pronomojn kun la fino “es” anstataŭ A: **mies**, **vies**, **lies**, **ilies** k.t.p. La “es” -parto estas pruntita de la tabelvortoj je ES (§15.4), kiuj ankaŭ estas posedaj. Tiaj posedaj pronomformoj estas neregulaj, sed tamen kompreneblaj. Kiel ŝercajn vortojn oni povus ilin eble iafoje uzi, sed en serioza uzo ili estas nepre evitendaj. (Wennergren 2005: 100)

「もしかすると **mies**, **vies**, **lies**, **ilies** などといった、形容詞語尾Aのかわりに “es” の語尾をもつ代名詞にであうことがあるかもしれない。この “es” の部分は、関連詞表のなかで所有をあらわすESから借用されたものである。このような所有代名詞形は不規則であるけれども、理解可能ではある。冗談としてならつかうこともできるかもしれないけれども、真面目な文脈では絶対にさけるべきである」

(3) の記述は事実ではあるけれども、説明にはなっていない。そこで、所有形として “mia” のみで使用され “mies” が使用されることがない理由をかんがえてみたい。

“mi” 「わたし」から派生する “mia” 「わたしの」は、エスペラント語文法全体のなかでは、“mi” 「わたし」という語根に形容詞語尾 “-a” が付加したものである。形容詞語尾が付加すると、一般的には語根の性質をあらわす。ここで “mi” 「わたし」を “ali-” 「他」と比較すると、(4) のようになる。

(4) a. *mia libro* 「わたしの本」

b. ?*mies libro* 「わたしの (所有する) 本」

c. *alia libro* 「ほかの本」

d. *alies libro* 「ほかのひとの (所有する) 本」

(4c) のように、“alia” が「ほかの」という性質をあらわすならば、(4a) の “mia” は、論理的には、「わたし」にかかわる性質 (たとえば「わたしのような」という意味¹²⁾) をあ

らわすべきであるようにおもわれる。しかし実際には所有しかあらわさない。そして、所有をあらわすために (4b) のように “mies” が使用されることもない。“mia” という形式は、所有をあらわすという点ではむしろ不規則にさえみえる形式であるにもかかわらず、ザメンホフ表から規則的に派生されうる形式である “mies” をおしのけて使用されている。

その理由は、“mi” 「わたし」 がヒトしか指示することがなく、ヒトにかかわるもっとも身近な性質が所有であるということではないかとおもわれる。これに対して “ali-” はヒトもモノも指示しうるため、かならずしも所有がもっとも一般的な性質とはならないということではないだろうか。指示対象の有生性が、所有形の選択に影響している可能性がある。

5. おわりに

以上、本稿では大阪大学外国語学部におけるエスペラント語教育の歴史について概観したのち、ザメンホフ表をてがかりに、エスペラント語文法に内在する問題点を指摘した。

人称代名詞の所有形にみられる問題点は、(3) でみたように、代表的なエスペラント語文法ではすでに指摘されていることである。しかしながら、なぜそうであるかの説明はなされていない。本稿ではヒトとモノの区別、すなわち有生性が関与しているのではないかという私見をのべた。また、管見のかぎりでは、日本語でかかれた文法書や教科書でこの問題にふれているものはない¹³⁾。エスペラント語文法にひそむ問題点の一事例として紹介した。

注

- 1) 「エスペラント」だけで言語名をあらわすので、「エスペラント語」とするのは冗長である、という立場がある。筆者自身は「エスペラント」でも「エスペラント語」でも、どちらでもよいという立場である。ただし、言語名であることを明示するときには「エスペラント語」という名称を本稿ではもちいる。
- 2) 以下の記述は藤原 (2015) とかさなる。ただし紙幅の都合で紹介できなかった部分をくわえて、再度紹介する。
- 3) どのような経緯でエスペラント語の授業が復活したのかは不明である。谷講師の指導教員であったモンゴル語科の橋本勝名誉教授におたずねしたところ、当時モンゴルに長期出張していたとのことで、詳細をご存知ではなかった。ビルマ語科の藪司郎名誉教授からは次の三点のご教示をえた。(1) 当時物理学を担当していた中村明教授がエスペラント語にくわしかったので、中村教授が関係しているかもしれない、(2) 大阪外国語大学で「研究外国語」科目が設置されたときに、エスペラント語も開講されるようになった可能性もある、(3) 当時の言語学担当の小泉保教授ならば経緯をご存知であったかもしれない。
- 4) 谷は「国際語」とは区別される概念として「民際語」をかんがえていた。くわしくはタニヒロユキ (2003) を参照。
- 5) Zamenhof (1905: §30) では表にはなっておらず、順番に列挙されているだけである。しかし、エ

スペラント語の文法書等では、表にされることとおおい。なお、どのような順番で表にするかは論者によってことなる。本稿ではZamenhof (1905: §30) で列挙される順番に準じた。また、読者の便宜のため、代表的な日本語訳をつけた。

- 6) 日本語に代表されるアジアの諸言語では「何番目の」に相当するいいまわしが可能である。他方、英語に代表されるヨーロッパの諸言語では「何番目の」に相当する語彙が存在しない。したがって、たとえば「西尾章治郎総長は大阪大学の第何代総長ですか」という疑問文を英語などでは直接いうことができない。英語などで類似したことをききだそうとすれば、「西尾章治郎総長の前には何人の大阪大学総長がいましたか」といった方法できかざるをえない。しかし、エスペラント語では“kiom”に形容詞語尾“-a”を付加した形式である“kioma”をもちいることで、日本語などと同様に、“Kioma prezidanto de la universitato de Osako estas la prezidanto NISHIO Shojiro?” (直訳:「何番目の大阪大学総長が西尾章治郎総長ですか」)と直接ききだすことができる。
- 7) *PIV 2005* では、“alies” に対しては “aliula(j), de iu(j) alia(j)” 「ほかのひと (たち) の」、 “aliel” に対しては “alie, alimaniere” 「ほかの方法で」といった説明があたえられている。
- 8) 以下の用例はエスペラント語の代表的な電子コーパスであり、ザメンホフの用例をはじめさまざまなジャンルからのテキストをまとめた 517 万 7208 語の用例からなる *Tekstaro de Esperanto* <http://tekstaro.com/> (2018 年 10 月 10 日最終確認) から検索したものである。引用箇所は「TE: 作品名」という形式で言及する。
- 9) エスペラント語の文法は 1887 年に発表された *Unua libro* 『第一書』が基本である。『第一書』には、エスペラント語でかかれた「主の祈り」などのテキスト、エスペラント語の基本文法 16 条、917 の語根からなる語彙集などがふくまれていた。エスペラント語文法は微修正をへて、1905 年にエスペラント語文法の決定版として *Fundamento de Esperanto* 『エスペラント語の基礎』が発表され、これ以上エスペラント語の文法を変更することはないと宣言された。本稿でも 1905 年の『エスペラント語の基礎』を重視する。
- 10) Zamenhof (1905) における基本文法はフランス語、英語、ドイツ語、ロシア語、ポーランド語の 5 言語で記述されている。本稿では日本語による抄訳でしめす。
- 11) *Tekstaro de Esperanto* では使用例が確認されない。
- 12) 「わたしのような」という意味をエスペラント語でいうとすれば、性質をあらわす接尾辞“-ec”を付加して“mieca”と表現することはできる。
- 13) 筆者が大阪大学外国語学部の授業で教科書として使用している阪 (2014⁴) は、エスペラント語文法を簡潔にまとめている。しかし、ザメンホフ表が掲載されておらず、相関詞が網羅的にとりあげられることもない。エスペラント語の教科書ではザメンホフ表がかならずといってよいほどとりあげられている状況からすると、異例のことである。網羅的にとりあげるならば、所有形に代表される問題点があるために、初級の範囲をこえてしまうという判断があるのかもしれない。

参考文献

川崎 直一

1963 『基礎エスペラント』大学書林、東京.

阪 直

2014⁴ 『20のポイントで学ぶ国際語: エスペラント入門』日本エスペラント協会、東京.

タニ ヒロユキ

2003 『エスペラントとグローバル化—民際語とは何か—』日本エスペラント図書刊行会、豊中.
日本エスペラント学会エスペラント日本語辞典編集委員会

2006 『エスペラント日本語辞典』日本エスペラント学会、東京.

藤原 敬介

2015 「タニヒロユキさんと阪大エスペラント講座」『La Movado』768: 3.

Duc Goninaz, Michel ed.

2005 *Plena ilustrita vortaro de Esperanto 2005*. Sennacieca Asocio Tutmonda, Paris. (PIV 2005)

Kalocsay, Kálmán & Gaston Waringhien

1985⁵ *Plena analiza gramatiko de Esperanto*. Universala Esperanto-Asocio, Rotterdam.

Wennergren, Bertilo

2005 *Plena Manlibro de Esperanta Gramatiko*. Esperanto-Ligo por Norda Ameriko, El Cerrito,
Kalifornio, Usono.

Zamenhof, Lazaro Ludoviko

1905 *Fundamento de Esperanto*. <http://www.akademio-de-esperanto.org/fundamento/index.html> (2018
年10月10日最終確認)